「横浪林海実験所」開所

記念対談

二〇〇六年四月二十七日、
前夜から降っていた冷たい雨が上がった。
照りつける太陽の下、青い海をバックに、
お二人の話は弾む。
「虫好き」という共通の趣味を持つお二人だから、
テーマを限らずにお話しいただいたのだが、
話は自然や環境から社会問題へと広がり、
現代人の「生き方の問題」に至った。

（株）村田製作所 社長
村田泰隆

解剖学者
東京大学名誉教授
養老孟司

右ページの写真を、対談されているお二人の方から見ると、このとおり。
山すそにある建物が「横浪林海実験所」。

養老　村田さんは、高知に来られるのは初めてだそうですね。

村田　ええ、そうですね。今朝、京都を出るときは雨だったものですから、蝶に会えるだろうかと心配していましたが、高知空港に着いたとたんに青空が見えたので、これは楽しみだと思いながらやってきました。まさに、朝から、蝶のほうに目がずっと行ったままになっております。

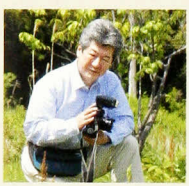
養老　何で高知に来られなかったのですかね。

村田　とくべつ理由はないのですが。鹿児島だとか、北海道だとか、信州には行きますが、なぜか四国は来ていないですね。

養老　僕は、十年足らず前から、四国がちょっと面白くて、ずっと歩いたのですが、山がものすごく険しいですね。虫をとる人が来ない理由は分かるのです。というのは、四国でないとされない虫というのがあまりなくて、多分それも

虫を捕る、蝶を撮る。

養老先生の高知の虫仲間が、お二人を案内したのは横浪半島の先端に位置する蟹ヶ池。ここは、高知でも数少ない湿原で、ヨシ、ススキ、スゲなどが茂る貴重な自然が残っているところ。湿原の三方は、シイの木を中心とする照葉樹林の山に囲まれている。



（上）イザ、出発。お二人に与えられた時間は、わずか２時間ほどだが…。

（下左）水辺の草地の前で、片膝付いて「何か」を待つ村田社長。狙っているのはシジミ蝶（？）。このあと、蟹ヶ池に一軒だけある民家の庭先に、舞う蝶を見つけた。もう、止まらない…。

（下中）木の葉や枝にいる小さな甲虫を捕るのは、この叩き網で。網を葉っぱの下にあてがい、現地調達の棒切れで枝を叩くだけ。でも、年期が入ってますね、養老先生。

（下右）虫仲間が、「ナイター」と呼ぶ夜間採集を仕掛け、養老先生を誘った。「日が落ちると、急に冷えてきたね。ちょっと期待薄だなあ」と言いながら、２台の仕掛けを行ったり来たり。

あって、来ないのではないかなと思っています。でもよく調べると、四国にしかいない虫もいるので、最近それを調べていて、ときどき四国に来ています。恐らく、蝶はないですよね、四国にしかいないというのは。

村田　蝶はないですね。でも、ミカドアゲハというアゲハチョウは高知県の天然記念物になっておりますね。

養老　あと何か、ありますかね。

村田　やはり蝶は本州と、あるいは九州と共通種が多いですね。

養老　なぜでしょうか。もう少し特異性があるというか。

村田　それはやはり、陸続きではなくても、瀬戸内海くらいの距離は、蝶の飛翔能力をもってすれば多くの場合、渡れるということが理由の一つだと思いますね。

環境問題は、人の内部にもある

養老　「森と里と海」について話をするようにということですが、いわゆる環境問題というのはいろいろな面がありますね。最近、私が一番強調しているのは、人は、環境というと外部を見るのですけれども、もう一つの面があって、それは自分のほうですね。

村田さんは、ずっと蝶をやっておられて。そんな村田さんを、会社の中の人の反応というか対応というか、どういうふうに見えていると思われますか？

村田　そうですね、会社にいると、さすがに趣味のことを考えていられないですね。社員の皆さんが、私の趣味のことをどう受けとめているか、自然環境のことをどう受けとめているかはよく分からないのです。

ただ、比較的最近、新しい本社に移ったのですけれども、社内から、古い本社の建物を撤去するにあたりビオトープをつくろう、という声が上がってきて、千五百万円の予算を付けました。そこで、せっかくお金を使うのなら「いったい、どんな生き物がすむのか？」と聞くと、生き物の名前を書いたレポートを持ってきました。いっぱい載っているんですね。私としては、遺伝子の攪乱を起こしたくないから、「違う場所から運んでくるのだったら、反対だ」と言いますと、「いや、ちゃんと自然に、周りにいるのが寄ってきてすみつきます」と言うわけです。きちんと調べている人がいるんだということで少し驚きました。

養老　会社の仕事をしておられることと、蝶の写真を撮っておられること、あるいは蝶をつかまえるということの間で、何か関連があるのですか。それとも、まったく切り離してやっておられるんですか。

村田　仕事と直接の関連はないですが、どちらかというと、頭の切り替えをするのに都合がいいですね。逃避場所があるといいますか。悩んだときなど、仕事と全く関係のない趣味の世界に、ぽこっと短い時間、首を突っ込む、という方法を取っているのですが。

養老　それは非常によい方法ですね、僕もそうですけど。その典型的な人というと、昭和天皇ですね。ウミウシをやっておられて。それと、南方熊楠ですね。彼は、自分で書いていますけれど、とにかく性格が偏っていて。それで、親戚はみんな心配して「あい

つは変になる」と。自分でもそうなるのではないかと思っていて、それを助けてくれたのは粘菌の研究だと言っていますね。

ですから、会社とか都会で、普通に働いている人には、自然の中で働くことをすすめています。まあ、言っても、たいていは聞いていないですね。そこで、乱暴な言い方ですが、「参勤交代しろ」とか言うのですけれども。つまり、都会にいる人は田舎に一定期間行って働け、と。

でも、そういう関心を持たない人はいったい何がないのだろうと、そういうことを最近よく考えるのです。何がないのか、一番ないのは多分、感覚ですね。そう思って考え直してみると、現代生活というのは感覚を非常にブロックするものなんですね。今、こうやって外へ出てやっていますと、いろいろな鳥の声が聞こえる、蝶が飛ぶ、陽が当たる、風が吹く、海の音が聞こえる、となるのですけれども、おそらく、会社の仕事を一所懸命やっていると、こういうものは全部とびますよね。

村田　ええ、それはそうでしょうね。

養老　とんでいる状態のほうがまともだと思っている人が、おそらく現在、九割くらいいるのではないかという気がしないでもない。だから季節感がない。毎日ものを食べているのに、それはもう、料理という形でしか認識していなくて、食物とのつながりがない。どこから来ているのかも、わからない。それこそ、子供が、魚というのは切り身で泳いでいると思っているのと同じで、大人も、多分そう思っているのではないでしょうか。あらためて聞かれれば「魚くらい知っていますよ」と言うでしょうが…。

アッ、何か来ましたね、違うやつが。

村田　飛んで来たのはツマグロヒョウモンのオスですね。（笑い）

養老　というふうに気が散るものですから、すみません。（笑い）

村田　そうですね。環境適応力が弱くなってるというのでしょうか。ある仕事の中に入ると、その世界しか見えなくなるわけです。いろいろな違った環境があったときに、それに即して反応して順応していくのが環境適応力で、その環境適応力がないのは進化ができないということになります。つまり、環境適応力のないような人が増えてくると、かなり偏った人類になっていく可能性があるのではないでしょうか。

関心がないものは、見えない

養老　最近少し興味があって、よく紹介するのですが、普通の人の感覚がどのくらい鈍いかということですね。それを知る一番いい方法は、子供と比べることなんです。生まれてひと月の赤ちゃん、自分では動けませんから、まあ寝たきりですね、その赤ちゃんの顔の両脇に、母乳に浸したガーゼをぶら下げます。片一方は自分のお母さんので、もう片一方はよそのお母さんの母乳を浸したガーゼです。そうすると、赤ちゃんは自分のお母さんの母乳のガーゼのほうをずっと見ているのです。つまり、母親のお乳をかぎ分けているのです。それと同じことをお父さんで実験すると、全く分からない（笑）。ということは、大人になると鼻がバカになるのか、関心がなくなるのか、どちらかですね。

村田　退化していっているのではないですかね。私なんかよく、人に、こういう所を歩いていて、「今日、蝶は十三種類見られたね」とか言うと、「えっ、そんなにたくさんいました？一つも目に入らなかった」って。そういう人に、家の中で、「さっき、そこにゴキブリいたね」と言うと、「あ、ゴキブリ、いましたよ」と。関心がないものは見えない、関心のあるものだけ見える。

養老　そうなんです。そこが、僕、今の社会で一番大きな問題かなと思うようになりまして。だから、鼻がバカになっているのではなくて、要するに関心がないから気がつかない。今の話は非常にいい例で、いても見えないのですね。

以前、テレビでやっていましたけれども、アフリカの人を呼んできて遠くのほうを見させて、視力四・〇とか六・〇とか、目がいいとか、言っているのです。あれは間違いですね。間違いとはどういうことかというと、自分の目が悪いのを棚に上げているからです。全員が悪いから「悪くていいのだ」と思っているだけで、本当は、人間の目って、そのくらい見えるものなのですよね。それを見えなくてもいいような生活にしておいて、みんながそうだからそれでいいと思い込んでいるという、一番危ない状況になっているのではないかなという気がするのです。

村田　それは、一つはやはり文明の利器に頼り過ぎて、五感が劣化していっているからでしょう。北京原人は恐らく、聴覚も嗅覚も視覚も、今の人間よりもすごく素晴らしかったと思うの

養老孟司

ようろう　たけし

解剖学者
東京大学名誉教授

1937年、神奈川県鎌倉市生まれ。62年、東京大学医学部卒業後、解剖学教室に入る。67年、医学博士号取得。その後、同大医学部教授となり、95年に退官。96年、北里大学教授に就任し、2003年、同大学を退職。現在、東京大学名誉教授。主な著書に、『ヒトの見方』、『からだの見方』（サントリー学芸賞受賞）、『唯脳論』、『脳に映る現代』、『涼しい脳味噌、正続』、『バカの壁』（毎日出版文化賞受賞）、『記憶がウソをつく！』、『いちばん大事なこと—養老教授の環境論』、『かけがえのないもの』、『養老孟司　ガクモンの壁』など多数。

村田泰隆

むらた　やすたか

（株）村田製作所
代表取締役社長

1947年、京都市生まれ。72年、ニューヨーク大学数理統計学科卒業。翌年、村田製作所に入社。その後、子会社の福井村田製作所の専務などを経て、91年、父・昭氏の後を受け社長に就任。趣味は、蝶の研究とクラシック音楽の鑑賞。日本鱗翅学会理事、日本蝶類学会理事、日本昆虫協会理事、日本自然科学写真協会会員。著書に、『チョウのいる風景』、『夢蝶美』、『飛ぶ宝石―蝶の情景―』など。

です。でも、今の人間は、すべて文明の利器に頼って、本来持っているものをギブアップしてしまっている。

養老　解剖の上では、それを「家畜化」というのです。人間を解剖しますと、身体のつくりそのものに「家畜化」が出ています。野生動物と家畜と両方いる動物、例えばブタとイノシシがそうですけれども、イノシシの顔とブタの顔の関係と、サルの顔と人間の顔の関係とがよく似ているのです。豚になるとだんだん鼻面が縮んできて、のっぺらな顔になってくるのですけれども、人間もそうなんですよね（笑い）。

それだけではないので、日常生活が、感覚のトレーニングからだんだん離れていっている。それで、こうした感覚を使わなくても生きられるようになっているんです。現在、禁煙運動が盛んで、タバコを止めさせたいので、タバコを吸う人をニコチン依存症と定義して、つまり病気と定義して、それの治療を健康保険で扱うようにしたいと、厚生省は考えたわけです。ニコチン依存症って聞くと、確かに皆さん「そう」と思うかもしれませんけれども、実はそういうことを考えている厚生省の役人は、国会依存症であり、給料依存症なのです（笑）。

ニコチン、タバコというのは具体的な感覚から入ってくるものですね。感覚から入ってくるものに依存するのは病気だが、頭の中にある国家にせよ、給料にせよ、実はこれは現実ではなくて、人間の約束事で作られたものなんですね。ですから、頭の中にあるものに依存するのは高級であるという考えが出るのは当然で、だから、病気、依存症じゃないというわけですね。動物は、絶対これを理解しないですね。私は、給料をもらっているサルって見たことがないので（笑）。実際に、理解しないと思うのですよ。

現代社会というのは、具体的な感覚から入る事物に依存するのは依存症であり、そうでない抽象的な世界のものに依存するのは依存症ではない、というふうな非常に勝手な割り切り方をするんですね。私から言わせると、全部それは脳みその中の話ですよと。感覚ですらそうですから。

エネルギー問題が、環境問題の根本にある

村田　究極的には、人間は地球上に住んでいるわけですから、いろいろな環境に取り囲まれている。その環境に相互依存しているはずなのに、依存していることすら気がつかない。

養老　そうなんです。恐らく、そうやって都会の中で生きていれば、きわめてまともな暮らしができると考えているのではないかと。

そこに問題があって、例えば東京の場合ですと、一番危ないのは物流ですね。物の流れが止まった瞬間に、全部アウトになる。食料が入ってこない。昭和二十年前後がそうで、僕はそのころ小学生で、完全に食料難でした。ですから、カボチャとサツマイモは食べない年代なんです（笑）。食料難がなぜ起こったかというと、田舎に行けば食べる物はあるのですが、運ばないからですね。流通が止まってしまう、商業がほとんど駄目になってしまう。そういう状態では暮らせない。そうすると、東京が、いつそうなるか、ということを考えてみると、地震という近々の問題もありますが、それより何より、石油切れですね。これは必ず起こるんですね。いくら掘っても、論理的に、これは最後があるのです。

村田　代替エネルギーを生み出す技術の開発も盛んにはやられているものの、まだまだ十分とは言いかねますね。

養老　多分、うまくいかないでしょう。石油って、実は、昔の生物が太陽エネルギーを利用して作ったものですね。だから、広い意味では太陽エネルギーです。太陽エネルギー以外のエネルギーって、原子力エネルギーしかないんですね。この原子力エネルギー、最大の難点はゴミがたまるということです。つまり、上手に循環できないという問題がまだ残っています。そうすると、エネルギー問題というのは、環境問題の根本にあるわけですね。

もう一つ、エネルギー問題が言われ出した時に、最近みんな言わないのですけれども、熱力学の第二法則、「エントロピーが増大する」っていうことがありますね。それを考えると、結局地球が使えるエネルギーは太陽エネルギーだけだ、という意見があったのです。この法則は何かというと、一方に秩序を立てると、他方に同じ量の無秩序が発生するということです。われわれが恣意的に、秩序だけを立てることはできない、というふう

に言い換えてもいいと思うのですけれども。だけど今、恐らく日本に住んでいる九十九パーセント以上の人が、一方的に秩序を立てることができると考えているのではないかと思うのです。

僕、環境問題の根っこにあるのはそれじゃないかと。ですからよく、部屋掃除を例にして言うのですけれども、汚れたということは床にゴミがたまっているのですね。まあ、ゴミがランダムに散らばっている。それを掃除機できれいに吸い込むと、床がきれいになる。ここの建物は世界の一部である。その世界の一部の床の上が整然とした秩序に変わった。つまり、きれいになった。ということは、世界の秩序が増した、というふうに普通考える。

村田　ただ移動しただけ、ですよね。

すべての生物は相互依存している。だが、人は…

養老　そうです。実は、掃除機の中にゴミが移動しただけなのですよ。今の人は、どうも、そういう考えで動かしている。ですから、昨日も、そんな話がいろいろ出たのですけれども、野生動物が畑に出るようになりましたね。シカが出る、クマが出る、イノシシが出ると。それについて、これまでずっとメディアが言ってきた説明は「山が荒れたからだ」と。これって、僕は、むちゃくちゃな説明をするなと思いましたね。山が荒れたら、ある意味では、野生動物は喜ぶので、何で里へ出てこなければいけないの、まるで人間じゃないか、という話ですよ。

山が荒れたから里へ出る。そうではなくて、理由は簡単で、私が思うに、すべての犬がいなくなったからなのですよ。野犬を全部狩り尽くして、ありとあらゆる犬をヒモでつなぎました。その結果、非常に喜んだのは、サルでありイノシシでありシカだったのです。クマも、もう警戒しません。人間はもう、ほとんど敵ではありませんから、出てきてしまうのですね。ところが、犬をつなげと言った人は、恐らく、そのことに一切気が付いていないだろうと。だから、環境問題の非常に小さな典型を言えば、私はこれじゃないかと思うのです。

それで、何をしているのかというと、最近テレビを見ていたら、モンキードッグというのをつくったと。猿を見たらひたすら追いかけるという訓練をして、つくった。そんなことしなく

たって、普通の犬を放したって、追いかけるわ、と思っているのですが。なぜ、普通の犬を放したらいけないかと言うと、犬に噛まれるからというのです。

僕なんか、噛まれて育っていますから。正直なことを申し上げて、犬に噛まれてどうかなるようなのは万物の霊長とは言えない、と私は思う（笑）。人間としての誇りはどうなったんだと思うのだけれども、犬に絶対に噛まれたくないというのでしょう。

村田　それは、生態系のバランスの問題で、今おっしゃったように、犬だけではなくて、ハチに刺されるのもいやだ、カに咬まれるのもいやだ、ヘビを見るのもいやだ、しかし、きれいな蝶が飛んでいるのはかまわない、トンボも美しければいいだろうと。そういう偏った、生態系のバランスを無視した一方的な考え方は、とんでもないことだと思っています。

養老　それが、なぜ通ってしまうかということですね。だから結局、その根本にあるのは、見えないからでしょう?と言いたかったのです。

もう一つ、私が心配しているのは海なんです。私は、海の専門家ではありませんが、これは当然やらなくてはいけないのではないかと思うのは、ひたすらモニターしたらどうかということですね。見えないから、「海が荒れた」ということは、ピンとこないんですね。今、テレビカメラが非常によくなっていますから、定点観測でずっとモニターしていたら、悪くなってくるのが必ず分かるはずだと思うのです。良くなってくるなら良くなってくるで。何か、そういうことをお考えになったことはありませんか。

村田　海ということに限らないのですが、生態系のバランスに関しては、絶えず考えています。すべての生物は相互依存しているわけですから。その相互依存って、ダーウィン自身はエボリューション（evolution＝進化）という言葉を彼の『オリジン・オブ・スピーシズ（Origin of Species＝種の起源）』で使っていないですけれども、彼はコ・アダプテーション（co・adaptation＝相互適応）という単語を使っています。エボリューションは後世の人が考え出した言葉であって、相互に環境適応するというのが正しい表現だと思うのですけれども、まさにコ・アダプテーションもないと世の中の物事が回っていかない。そのアダ

プトする能力を人間だけが失っている。

養老　折り合いがつかないということですね。その裏にあるものはなくてもいい、つまり感覚が開けないんですね。見ないほうがいい、触らないほうがいいということですね。これを何とかしないと、一方向に進んでしまうのではないかと思って、仕方がないのです。

村田　それは、学問でもそうでしょう。今の自然科学、とくに、現代の自然科学は、昔の博物学と大きな違いがあります。これは受け売りですけれども、博物学と自然科学の大きな違いは、博物学の世界には美の概念があるということです。自然科学は、何かこう、冷たいもの、というイメージですね。博物学に進んでいくと、「森里海」ではないですが、いろいろなものが関連しあっていますから、全体像を見ないと博物学にはたどり着けない、その中には美の概念もある。ということで、非常に素晴らしいなあと思っているのです。

感覚を閉じたとき、多様性が失われる

養老　ただ私は、ごく普通の人の生活を考えると、生活は明らかに単調化しているという気がするのです。たとえば、若い人が、フリーターとかニートとか言われていますが、逆に言うと、いろいろな半端仕事がないんですね。都会にいたら、せいぜいコンビニに勤めるとかしかなくて。非常に限られた、単純化された生活様式ですね。政治的には、ずっと平和と民主主義で、自由平等と言っているのですけれど。ずっと見ていると、どうもそうではないという気がする、何かが違うという気がするのです。

最近、いろいろな地方都市に行きますが、このあいだ新潟県の新発田に行きましたら、あそこは街道沿いの町なんです。中心街は、商店街ですが、完全に半分はもう、シャッターが下りていて。金沢でも、古い商店街は、個人商店がほとんどなくなっています。つまり、自家営業ということが今、できなくなって、大きな会社のひとつになっている。だから、コンビニになり、チェーンになり、スーパーになり、パチンコ屋になり、という

かたちで、日本じゅうどこでも似ている。それで、何と呼んだらいいのか、普通の人、一般市民がですね、そういう生活を望んできたのかなと、ときどき疑うんですけどね。

村田　画一化されて、多様性をどんどん失っていくということは、視野がますます狭くなっていくことだと思うんですけれどもね。

養老　日本中がそうなっていく、そのことを、皆さんが望んでやっているのかということですが。

村田　決して、望んでいるとは思いませんが。分からないうちに、そういうふうに引っ張られていって、そのままというか。自分で、その殻を打ち破って、何かに挑戦しようという人が減ってきているからじゃないですか。

養老　それが逆に、多様性がなくなるということの帰結ですね。みんなが同じほうにいく。それはやはり、一人ひとりが、感覚を閉じることから始まっているのではないかと。要するに、目が悪ければ見えないのですから。見えなければ気にならないですから。

　先ほどの、海の底の話は、そのつもりで言ったのですけれども。海に比べて、陸の「緑」は、やはり目立ちますから、みんな気にするわけです。しかし、地面の中には根っこがあって、じゃあ、その根っこがどのくらい広がって、根っこの間にどのくらい生き物がいるのかということ、僕はあまり聞いたことがないのですよ。その辺になると、やる人がかなり減ってしまう。

　海をこうやって見ていると、一応見えるんですけれども、底は見えないですよね。だから見えないものをどうやって見えるようにしてやるか、ということが、私は非常に重要なのではないかという気がしてきています。

村田　自分の得意な分野にこだわるのではなくて、そこをてこに、どんどん頻繁に「これはどうして?どうして?」と、疑問をたどって行けば、自然と視野が広がっていくのではないかと思うのですよ。

養老　それもありますね。その逆に、閉じ始めたらどんどん閉じていっても生きられる、そんな世界をつくっているのではないでしょうか。

村田　質問しなくても、疑問を感じなくても、何でも「これでいいんだ」と決めてしまえばね。

養老　私は、戦前戦後の育ちですから、別の意味で、戦争中に

よく似てきたな、と思ってね。当時は、一億玉砕でね。本土決戦で、もうみんなが凝り固まっていた。その時に「この戦争、負けるよ」と言えなかったんですよ。環境のことも、それに近いところがあって、そこまで公式につぶされてはいないのですけれども、やはり環境問題を議論するというのは「青い」というか、大人の感覚ではないと。大人というのは、やはりちゃんとお金を稼いで、そういう仕事をして、というふうな考え方があると思うのですね。

そうすると、村田さんなんかが蝶を追いかけていても、割合に世間の許容度が高いのは、一方でちゃんとした仕事をされているからですね。

村田　たまたま仕事自身も、モノをつくる、要するに製造業ですから。モノをつくるというのはいろいろな材料を使って、いろいろな方法を考えて、他社とは違ったモノを生み出していこうという努力をする。そのためには、考える要素というのは山ほどある。そのどれをとってもやりがいのある範囲がものすごくたくさんあるから、やっていても楽しい、ということになるのですけれども。ほかの人はどういうふうに見ているのか、知りませんけれどもね。

モノづくりの国ニッポン、その深層には

養老　「日本の戦後の発展は、モノ作り」とよく言われますね。僕、この年になってしみじみ思うのは、ＮＨＫがやっていた「プロジェクトＸ」というの、ああいう計算器をつくったり、車をつくったりすることを、本気でやっていた人たちってどういう人たちかというと、どうも私と同じような人たちではないか。では、その人たちに何が起こったのかというと、一億玉砕、本土決戦と言っていたのが、ある日突然ひっくり返って、平和憲法、マッカーサーばかりになっちゃった。そうすると、僕ら子供の気持ちの中に、世の中で言われていることはあまり信用できないな、という暗黙の了解が生まれて。そういう感覚で生きてくると、じゃあ、頼りにしていいものは何だ、というのがあるのですね。これですよ。

僕はよく、「医学部を出て、何で解剖をやっているのですか」と聞かれるのです。何度聞かれたか、分からない。一生のうちで一番多かった質問です。医者が、死んだ人みてもしょうがな

いでしょう、という極めてもっともな質問なんですよね。で、その理由をこの年になって考えると、何とやはり、死んだ人はうそをつかない、ということなんですね。非常に変な言い方ですけれど。実際におやりになると分かると思いますが、ホルマリンで固定してある死体を自分で解剖すると、一日ではできません。その日の午後やって、家に帰って、次の日行って、その人をもう一度開けて見た時に、仕事がぴったり昨日やったところで終わっているのですよ。生きている方なら、途中で治ったということがあるのですけれども、解剖の場合、治ったということは絶対ない。

つまり、そこに現れていることは、全部私がやったことだと。それが、歴然としている。そのくらい安心なことはないのですよ、今になってみると。だからそれ、解剖をやったのだろうと。

村田さんのお仕事も、言ってみれば、「プロジェクトX」に近いですよね。ではどうして、必死になって計算器をつくったり、車をつくったりしたかというと。ちゃんとつくり上げてちゃんと走る車は、どこに持って行っても、ちゃんと走るんですよ。そうでしょう?どこも壊れていないのに走らない車というのは怪談にしかならない。そうするとつまり、戦後の経済発展を担った人たちって、根本の心理はそれだったのではないかなと思うのです。

それを百年前に持っていくと、全く同じことがあるのです。高知でそう言うと、あまり人気がないかもしれませんけれども。明治維新というと、坂本竜馬とか福沢諭吉とか西郷隆盛と、こうなってくるんですね。ところが、私が見る明治維新というのは、北里柴三郎であり、野口英世であり、志賀潔であり、豊田佐吉なのです。お分かりになりますでしょう?どこが違うかというと、片一方は人間の世界に顔を向けているのだけれども、もう片方、北里さんだったら、ベルリンだろうが熊本だろうが黴菌（ばいきん）にかわりがあるわけじゃなしと。私は、それが明治以後の発展を支えたのではないかと思う。

僕はよく、政治は嫌いだと言うのですけれども、どうしてかというと、社会はあたかも政治が動かしているように見えるのだけれども、それはひょっとして違うのではないか。本当の意味で実質的に人の生活を変えていったのは、ああいう人たちではないのか。そこら辺、いかがですか。

村田　それは、例えば今、携帯電話をお持ちでない方は少ない

ですよね。ああいうモノを生み出すためには、携帯電話そのものを設計し、つくった人たちと、それを可能にした部品をつくった人がいて、それはどんな機能を追求すればそうなるか、ということを絶えず意識してやってきた人たちですね。ですから、そういう人たちがいる限りは、モノ作りの世界というのはまだまだ大丈夫だと思うのですけれどもね。

養老　ちょっと乱暴になるかもしれませんけれど、われわれが歴史なり過去のことを教わるときに、歴史というのは人文科学というふうになっていて、文科系の学問なんですね。そうすると文科系の学問を専門にする人だけで、そういう技術的な、あるいは生化学的な世界の歴史が書けるかというと、私は非常に書きにくいだろうと。ところが実際に、自分の現在の生活を見ると、私が鎌倉から高知に簡単に来られるのは飛行機があるからで、その他諸々で、もう言うまでもないのですけれども、通信だって、メールなりファクスなりがほとんどですね。そうじゃありませんか？

　そうすると、われわれ自身の生活を、根本的に急速に変えてきたのは科学技術であって、政治ではないだろうという気がするんですね。せいぜい、あとは経済ですよね。だれかが稼いで、それによって得たものをシステムの中で回すことはできる。それでみんなが、それぞれ働いて食べていくようになる。

村田　しかし一方では、利便性がどんどん高まっていくにしたがって、地球環境がどんどんと劣化していく可能性が高くなっていくわけです。地球上に人類が増えていくにしたがって、まあ、人類は地球の表面に住みついたガンみたいなものですから、ある程度、間引かないとバランスが取れないと。文明の発展だけがすべてではなく、バランス感覚が大事なんだと。他の生態系と共生して、はじめて生き残れるのだと。最近は、そういうふうに、皆さん、少しずつ認識が変わってきたと思うのです。

　それでもまだ何か、文明の利器が最優先になっていて、人間の本当のコンフォートですとか、そういう感覚が後に押しやられてしまっています。それは、見かけ上のコンフォートであって、メンタルなコンフォートではないわけです。そんな、フィジカルなコンフォートばかりを追求しているのではないかと思うのです。

間伐材をどうやって経済ベースにのせるか？

養老　その辺はおそらく、多くの方が一致する意見だと思うのです。ただ必ず、「どうするのか」という話になって、その時にたどり着く結論が「人間のほうを変えてもらわないと」と、一方的になるんですね。

高知県でもそうだと思いますけれども、例えば道路をつくる、虫屋から言わせると、舗装してほしくないんですよね。「舗装するくらいなら、舗装していない山道を上手に走れる車をつくってくれ」と言いたいのですけれども、きれいに舗装するのです。

環境を考える限り、できるだけいじらないほうがいいとしたら、舗装したふりをして、適当に工事をすませるというわけにはいかないかなあと、よく思うんですよね。

村田　いやまあ、しかし、ここがこうして保存されるようになった限りは、そのバランスですね。もう、キッチキチにきれいにしなくてはいけないというわけでもないだろし、最低限、どれくらいでやめておけば、残りが維持できるか、という考え方でないといけないのではないでしょうか。もう何が何でも、すべて利便性を追求して完備してしまうと、本来あるべき姿が目に入ってこなくなってしまう、というふうに思います。

養老　そうですね。本来の姿というと、ここは幸い、スギはほとんど植わっていないですよね。

村田　私もそれを見て、よかったなと思っています。スギやヒノキは植わってないし、照葉樹林が残っているし、常緑広葉樹がたくさんあるし。

養老　最近、僕、都庁に呼び出されて、「スギ花粉の少ない森作り」というのに担ぎ出されましてね、やれと。理由は簡単で、昨年か一昨年から、石原都知事が花粉症になったからなのですよ。やはり花粉症は広げなければいけないなと思って（笑い）。

これをどうするかというんで、面白いなと思った例を申し上げますと、二十七日にＮＨＫでやっているはずなのですが、知り合いの大工さんの話なのです。福井県の武生に住んでいる大工で、アクティブな人です。福井県もやはり、間伐が必要な林がいくつもある。森林組合の人と彼が話をして、どうして伐れないのだと問いつめたら、森林組合の人は「安いから、伐れない」

と言うのですね。

高知県などもそうでしょうけれど。福井県の場合、土場渡しで立方メーターあたり三千円。そんなものでは採算が取れないから伐らないと森林組合は言う。そうすると、その大工が怒るわけです。そこで考えをやめられたら、楽なものだ、お前らもっと考えて仕事しろと。根本は、間伐をする必要がある、しなければいけないのだから、そうするとそれを何とか経済ベースに乗せるということを考えるのが、お前らの仕事だと。

だけど、いきなりそれを言ってもダメなので、彼はそれを言わないで、自分で考えるわけね。それで何をしたかというと、彼の仕事の中で間伐材をどう使うか、ということですね。間伐材は径がそろう。径のそろった六角形の丸太がたくさんできる。それを真っ二つに切ると、六角形を半分に切った台形ができる。台形を上下互い違いに並べて張り合わせると板になりますね。板を何枚も積み重ねて張り付けると大きな木のブロックができる。それをスライスしてパネルにする。その時に一つだけ工夫をして、彼は真横に切ったのです。そうすると半分の年輪が出ますよね。だけどともかく、木口面の方向に切ったわけです。強度試験をすると、当たり前ですけれども、その板は上下方向に対しては、横に切った板の五倍くらい強いのです。それを床板などに使うと、現在売られている合板の価格で売ることができると。

そこまで確認して、いわば実用化したわけですね。そうしておいて、彼は、森林組合の人に、「いくらで売れれば、お前ら間伐するんだ」と聞いたら、「九千円なら伐ってもいい」と。「じゃあ、俺が九千円で買う」と彼は言ったわけです。

今、福井では、県の建物にその集成材を使うということを決めたそうです。本当のことを言うと、三千円に色をつけて買ったほうが本人は儲かるわけ。だけどそうしないのは、根本の目的は、間伐材を利用することではなくて、間伐材を売るということだからです。

皆さんがそういうふうに、それぞれのところで具体的に考えていけば、ことが進んでいくのではないかと、この話をきいて思ったわけです。

村田　そうですね、モノづくりの世界は、絶えずそんなものですね。私どもも、同業他社がこんなモノをつくってきた。そんなモノを同じ値段でつくったって競争にならないから、じゃあ、

材料を変えるか、工法を変えるか、両方とも変えるか、いったいどうすればいいんだ、ということを絶えず考えようとしていますけれどもね。

養老　だから、漁業であれ、林業であれ、農業であれ、あるところで考えをやめられては困るわけです。次へのつなぎといいますか、どこまでそれを追って考えることができるかということが大事で、やはり最後は、人の問題に戻ってきますね。

それにはまず、虫を見たら「虫」の一言で、何の区別も付かない人をどういうふうに減らすかという問題。その次は、三千円でしか売れないから伐れないと、そこで考えをやめる人をどうするかということ。これは僕、「姉歯のマンション」を買う人にそっくりだなと思うのですよ。このマンション、この見かけで、この値段だったら安い、買った、と。そこから先は考えていないでしょう。それで生きられれば楽なものですよね。

だから、身の回りのモノを便利にして、楽に生きられるように、楽に生きられるようにしてきた結果、そのツケが回ってきているわけですよね。そうすると、人間はどのくらいそこで苦労しなければいけないのか。考えるにしても、どこで考えをやめてはいけないのかとか。そういうことを、どうやってこれからの人たちに身につけさせていくかということが、一方の問題になっている気がしてしょうがないですね。

村田　便利な生活をしている限り、「考える癖」なんか、つかないですね。

私は、幸いにもといいますか、自分の趣味の関係で、こういった立派な施設ではなくて、ペルーのジャングルに三日ほど生活するとかいったことを経験しています。そこは、文明の利器といったものは何もない、携帯電話もない、新聞もない、ラジオもない。人間が住んでいる最後の村から一時間半も歩いて、山の中に入ってそこで生活する。食料は、多少は持っていくものの、その日に獲れた物を食べる。獲れなかったら食べない。少なくとも、水分は取りますけれどもね。そういう所でも生活をしてみようと。そんなことを経験して、それも良かったのかなと思うのです。普通の人はそんなこと、考えもつかないですよね。

あらかじめ「答え」が
分からないことはやらない、
というのは恐らく環境問題では
通用しません。
なぜならば、われわれは、
あらかじめ自然環境を
完全に理解することはできないから。
「じゃあ、どうするんだよ」
という方のために、
私は「日本文化は古くから
〝手入れ〟でしょう?」と申し上げたい。

——養老孟司

美しい蝶を、
次の世代に残していくためには、
やはり、環境を保存しなくてはいけない。
そのためには、
蝶のいるフィールドだけを
大事にするのではなくて、
生態系のバランスすべてに
それは通じることですが、
「全体を残さないと」
と思うようになりました
——村田泰隆

「意識を変える」のはむずかしい

養老　どうしたらいいのですかね。

村田　モノがだんだんと足りなくなってくれば、必然的に考えざるを得ないわけですが、そこまで至る前に、もう少し知恵を働かせて、考えるようにしてもらわないといけないと思いますね。

養老　さっき、エネルギー問題で持ち出したことなのですけれども、いずれ石油が枯渇するから、その時にどういう社会形態をとるかを考えるということも、当然、もう考えていてもいいことなんですよね。まあ、その場になったら考えますというのも一つの立派なやり方ですが。けれど、それは突発事故に対してであって、石油はね。

私は恐らく、イラク戦争なども、石油が減っていくということが背景になって起こっていると思いますから。石油を、いずれ人間が使い尽くすということが暗黙の前提になって、その時に、日本はどうするのかということを、やはりみんなが考えておくべきだろうと思うし、なくなる前から考えたほうが有利に決まっていますよ。

村田　今、太陽エネルギーの利用の方法の一つとして、太陽電池がありますが、この生産の半分以上は、日本の会社がやっているわけですね。そういう技術は、やはり最初に、「代替エネルギーを考え出そう」ということで努力をしてきた日本の企業の成果だと片方では思います。

エネルギー変換効率が、一時は、太陽電池は一四パーセントくらいしかエネルギーに変わらないと言われていたのが、とっくにその壁は破られて、もう少し効率は上がっています。しかしそれでも、非効率な変換なんです。まだまだ、考える余地は残っていると思います。

この太陽、こんなにあるのに、ムダに、エネルギーをどんどん捨てている。それを、もう少し有効に活用したら、そんな、石油あるいは化石燃料にこだわらなくても生活できるようになると思うんですけれどもね。

養老　生活様式の変化そのものも必要となってきますね。その中に、いわゆるサスターナブルという考え方が加わって。この「森里海」もそうだと思いますけれども。どういうふうに意識

を変えるかということは…。

村田　一つにはやはり、必要性を感じてもらわないと。どうなってもいいという人ばかりだったら、もう、ダメになってしまいますから。

養老　そこは、どうやればいいのでしょう、人に強制するわけにもいきませんし。まあ、私は一人で、子供を連れて「虫とり」行くのですけれども（笑い）。

去年も、島根県で虫とりの会とかいって、親御さんが子供さんと一緒に来て、五、六十組を連れて虫とりをしました。何時から何時まで、ここからここまでとコースが決まっていて。一応、私が引率者か何か知りませんけれども、先生か、一緒に行ったわけです。そうしたら、けっこう面白いコースで。ゾウムシの、めずらしいのがいたものだから、後ろに移ったの。そのうちだれもいなくなって。「先生、時間です」とか言って、呼びに来られちゃって。だれが、何のために、虫とりをやっているんだか、分からなくなっちゃったのですけれども。もう、僕より長い時間、虫をとっている子供がいないんですよ、これ困るなあと思って。

村田　今日は、私が終わらなくて。養老先生の方が先に行かれてしまいました。

私は、蝶の撮影に夢中で、昼までといわれていた時間をたっぷり使ってしまって。実は、この対談、事前の打ち合わせをする時間もなくなって、そのまま、この場へ出て来てしまいましたけれども（笑）。

養老　そこら辺ね、子供たちの教育もありますし、大人の感性を開かせるとさっき言いましたが、自分自身がもっといろいろな能力を持っていて、いろいろなことに関心が持てるということ、それを都会の人に教えるためには、やはりある程度の余裕が必要ですよね。

異端こそ、多様性の源泉

村田　それと多様性の背景には、英語で言うマーベリック、異端児の人たちを排斥するのではなくて、むしろ多様性の源泉だということで大事にするのですが、日本人は案外、その辺の異端児を、どちらかというと「のけ者」にしてきたからいかんのではないかなと思います。

養老　それは明らかにありますね。業界から排除するという習性が。そうすると業界が安定する。それは最大多数の幸福でもあるのですけれども、なかなか難しい問題も含んでいますね。

最近の例でいうと、ホリエモンがいいか悪いかは別にして、このあいだこんな話がありました。ホリエモンを捕まえた法務省の連中と警察庁の連中、ちょうど課長クラスないし課長補佐クラスで、その、具体的に働いて、ホリエモンを捕まえているクラスというのは、背景を調べると東大で同期なんです。片方はあれだけ金を稼いで、片方は決まりきった給料でふうふう言って働かされて。じゃあ、捕まえてやろう、ということになるのも無理ないなという話で。こういうことはいいことかということですね。つまり、今おっしゃったようにマーベリックという意味で言えばね。

変なやつを走らせるという感覚が、日本人には割合に少ない。それが、人の迷惑にならなければという了解があるのでしょうけれども。そこら辺は難しいところでね…。

村田　多様性のすすめというのは、まさに人間もそうですけれども、自然界もスギやヒノキの植林で単一の山になってしまうと、それこそ生物相が貧相になってしまう。そうすると進化が起こらない。それで、だんだんと滅亡の方向に向かってしまう。こうしてここから、山の緑を見ていますと、多様な植物相があるのがわかりますね。目の前に、私たちのすぐうしろですが、海があって、非常に素晴らしい環境だと思いますね。こういう、多様で豊かな環境が、とても大事だということですね。

養老　ただ、海について言うなら、さっきも言ったように、僕は、海の中って見ていないのでね。海は好きなのですけれども、やはり、コンスタントに海の中を見ていないと。こういう山を見ていれば割合気がつきますけど。もうちょっと海の中の監視を、一般の人が分かるようにする必要があるのではないか、とかね。

村田　海のことといいますと、私は自分がカナヅチだから、特別の関心はないのですが。ただ、超深海の、何百度、百何十度という温度のお湯がわき出ている所に住んでいる原始的な菌、バクテリア類ですね。そんな生き物については、非常に関心を持っていますが。

養老　神奈川県の三浦半島で、ちょうどこのくらいのサイズ、

もうちょっと小さい面積かもしれませんが、小川のあるところを一カ所だけ、熱心な人たちが保全しているのです。水源から干潟までありまして、そこへ行くと、私が子供だったころの生き物がほとんど全部残っていますね。そういう意味では、この辺は、保全するのに非常に有利でしょう。ここからは川は見えませんけれども、恐らく流れがどこかに。その水源から海まで、簡単に保全できて、全体をネイチャーのモデルとして観察できるので、教育の場としては非常にいい場所だと思いますね。本当に、小さな川が一本あるといいのですけれども。

日本は、そういう自然観察というか、環境のモデルとしては非常に恵まれていますよね、小さな範囲でできますから。大陸なんかで、水源から河口までといったら容易なことではないですから。

村田　四国では、とくに高知の場合は、平地が少なくて、すぐに山から海まで直結しているから、いわゆる川にしても比較的短くて、保全がやりやすいのではないでしょうか。

養老　全体像をつかむという意味では確かにいい風土かなと思いますね。

ところで、このまま二人で話しているだけでよろしいんですかね。何か、皆さん、ご質問とか。

――「森里海」といっても、ほとんどの人は多分ピンとこないのでは。ある部分では、例えば山にかかわった人は、山がおかしいと多分気付いているだろうし、われわれ水産関係の者ですと、川や海は、やはりおかしいと。その、部分ということでさえ、職場のなかで理解を得るのは大変なんですけれど。ましてや「森と里と海」を一緒にくくって何かをするなんて、別世界のような目で見られるんですね。で、その先といいますか、このまま行けば多分、生き物は次々と全滅するだろうと。では、一体いつ気がつくのと。その辺は、先生。早く気付かせる方法っていうのはないのでしょうか。

養老　今おっしゃったことの背景にはもう一つの問題があって、今の人はというか、まともな組織の方だったら、先の見えることしかやらない、という習慣をつけておられているからだと思います。僕は、これを、「ああすればこうなる」と言うのです

けれども、理性的にものを考えようとすると、どうしても「ああすればこうなる」になりがちなんですね。だから「やってみなければ分かりません」という答えが、無責任な答え、というふうにとらえられるわけです。私は、一生のあいだ、それをずっと経験してきましたから。「こういうことやりたいんですが」「やったら、結果はどうなる」「やってみなければ分かりません」。すると「顔を洗って出直して来い」とこうなるんですよね。つまり、その方々は、ほとんど神様みたいなもので、「先行きが分かったらやる」って言うのでしょう?

人生、先行きが分かっていると思う人には、僕は「背中に自分の命日を書いて歩いてくれ」と、いつも言っているのですが(笑)。自分の寿命すら分からない人間が、先のことがやる前に分かると思うのが、そもそも傲慢ではないか、という考え方をあまりしませんね。だけど、「こういうことはやらなくてはダメでしょう?」。つまり、「こういうふうな方向で動かなければダメでしょう?」ということは言えるはずだと思うのです。それが分からない人ばかりではないと思うのです。

あらかじめ「答え」が分からないことはやらない、というのは恐らく環境問題では通用しません。なぜならば、われわれは、あらかじめ自然環境を完全に理解することはできないから。「じゃあ、どうするんだよ」という方のために、私は「日本文化は古くから〝手入れ〟でしょう?」と申し上げたい。

「手入れ」というのは、相手を見ながらずっとやっていくわけで、最後どうなるんですかって聞いても、しょうがないんですよ。食っていけるようにするしかないんだから。稲作だって、上手に稲が育って、できるだけたくさん米が取れるようにするしかない。それじゃあ、無限に肥料を与えればいいかというと、そうはいきません。相手の状況を見ながら、その都度、手を打っていくのでしょう?と。こういうふうに言うしかない。

それを、オフィスの中で働いている人は、最終的な結論を先に出せというのです。そういう人ははっきり申し上げて、オフィスから追い出したほうがいいと、私は思いますがね。それで、田んぼで働かせれば分かると思います。

村田　私、ちょっと思い付いたのですけれども、日本人は、やはりある程度、考えが独特の枠の中に閉じ込められがちなのですね。実は、外国の人が書いた本、アメリカ人の書いた本

でアラスカの話なんですけれども、エスキモーとクジラと、カナダの森とサーモンと、その自然の循環の全部を、ずっとお話ふうに書いている本があります。本当は、観察記録なのです。アメリカ人の中でも異端児といわれた人が、実際に、フィールドワークで調べたことを、物語ふうにきれいに書いた本です。それを読んで、すごく感動しました。その本のことを、ぜひにと思って。今ちょっと、名前をド忘れしましたので、帰ったら、その本*の著者とタイトルを連絡します。

要は、何が言いたいかというと、日本人ではなくてアメリカ人で、そういう「森・川・海・里山」、そういう循環する全体をとらえて、何をしたらどのようなものが生き残って、何が起こったか。自然界で、放っておくと、うまく回っているのはなぜか、というようなことをすごくきれいに書いているのです。これは面白い本だと思ったのと、日本人でこんなことをやった人はいないな、と思いながら読みました。ご参考までに、読んでみられたらと思います。

*「極北の動物誌」ウィリアム・ブルーイット著、岩本正恵訳。新潮社2002年刊。

―― 村田さんにお伺いします。村田さんの、集英社から出された蝶の写真集*を友人の写真家が見て、「蝶だけを撮っているのではなくて、後ろのフィールドがたくさん写っている。蝶も含めて、その自然が好きなんだなあ」と言ったんです。その、村田さん自身の趣味のことと、どうしてこの「森里海連環学」を応援しようと思われたのか、ということをお聞きしたいのですが。

村田 そうですね。私、蝶の趣味はもう五十年になります。最初は小学生の頃ですから。昔の小学生は、そういうことをみんなやっていたのですね。昆虫採集は、一番普通に男の子がやる遊びですね。最初はとにかく、たくさんとりたい、きれいなのをとりたい、珍しいのをとりたい、種類を集めたい、そういうのが発端ですね。そのうちに中学生くらいになると、この蝶って、成虫はきれいだけれど、生態はどうなっているのだろうということに興味がいって、卵を採ってきたり、幼虫を採ってきたり、庭にその餌を植えたり、だいぶ長い間、飼育に凝っていた時期があります。

社会人になってからですね、蝶が飛んでいるところは、標本箱の中よりもはるかにきれいだと思うようになって。その瞬間の姿をとらまえたいと。自分は、プロのカメラマンではないけれども、昔と違ってカメラもフィルムも良くなっているので、素人でもなんとかできるのではないか。というわけで、魚眼レンズを使って、百八十度近い視野で蝶に迫っています。だいたいは逃げられるのですけれども（笑）。撮影していますと、後ろの背景が残るとこの蝶も残るのだと。この背景が残らなければこの蝶は生存できないのだ、ということに気がつきまして、そういう写真を撮りだしました。

それを写真集にしました。本のタイトルを『飛ぶ宝石』とつけたんですね。人間が、人工的に、掘って、削り出して、ぴかぴか磨いた石とは、違う意味で、自然の昆虫は、蝶に限らないですけれども、本当にすべて、宝石のように美しい。

その美しい蝶を、次の世代に残していくためには、やはり、環境を保存しなくてはいけない。そのためには、蝶のいるフィールドだけを大事にするのではなくて、生態系のバランスすべてにそれは通じることですが、「全体を残さないと」と思うようになりました。

対談の最初のほうに言いましたように、「カに咬まれるのはいや。ハチに刺されるのもいや。ヘビが怖い。しかし、美しい蝶やきれいなトンボがいるのはいいし、セミの鳴き声が聞けるのもいい」と。「ヒグラシなんかいいじゃない。しかし、うるさいアブラゼミなんかはいらない」とか、人間が勝手に選択することは、本当はできないのです。

昨年の「時計台対話集会」に協力することを決めましたのも、できるだけ多くの人が、「森里海の連環」を勉強することで、自然の全体像を把握することにつながり、それが、「全体を残す」ことの重要性を理解することになっていくのではと思ったからです。私自身も、自分の趣味の世界から、さらに踏み込んだところに行けるのではないかなと考えて、できることならサポートしようと決めたわけです。

*『飛ぶ宝石―蝶の情景―』写真＝村田泰隆、文＝奥本大二郎。集英社２００１年刊。